

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「地域性と文学」への一考察：先行研究を概観しながら展望を考える
Author(s)	柳瀬, 善治
Citation	近代文学試論, 60 : 61 - 72
Issue Date	2022-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/54882
URL	https://doi.org/10.15027/54882
Right	
Relation	



「地域性と文学」への一考察

— 先行研究を概観しながら展望を考える —

はじめに

本稿では「地域性と文学」に関する先行論を概観しながら、そこで提出された理論的課題と今後の展望について考察することにした。

一 「地域性と文学」における「歴史性」の問題

「地域性と文学」については多くの研究業績があり、枚挙に暇がない。『近代文学試論』も過去に同様の「地域性と文学」についての特集を組んでおり、今回が二度目となる。^① かくいう私個人もいくつか「地域性と文学」に関する文章を書いたことがある。^② 『敍説』の「島文学特集」では私の出身地である三重県の島をめぐる文学として三島由紀夫『潮騒』をはじめとするいくつかの作品と神島や答志島のような島々との関わりを論じた。『東海の異才・奇人列伝』では「異色の仕事人」と題し、当時の大須演芸場の足立支配人やイシダ元社長の石田研一氏にインタビューし、戦後の名古屋の演芸界や東海地区の菓子業界について概略を述べた。また、現在「尾道市史」の文学に関する項目を担当し調査を行っている。^③ 本稿では「地域性と文学」をめぐる理論的課題について考

察することとした。

ここではまず「地域性と文学」をめぐる多くの業績の中から明晰な問題意識のものとして『1930年代の〈東北〉表象』の編者森岡卓司の序文を取り上げることにする。

森岡は同書の序文で次のように述べている。

ある地方の文学を研究するというのは、いったいどういうことだろうか。こうした大上段に振りかぶった問いは、広く知られることのないなかつた文学者やその営みをあきらかにしてきたこれまでの研究の蓄積を前にして、あまりに軽率なものに映るかもしれない。しかし、そうした成果の数々を総合し、異なる文脈へと接続し、ひらいていく方法論について省みられることは、少数の例外を除いて、これまでさほど多くなかつたようにも思われる。^④

また、森岡は歴史学での業績を参照しつつ「新たな日本に直結する『深日本』言説が浮上した時期として、1940年代の〈東北〉言説に注目し、「芳賀の提言は、一面においてこうした歴史的な「観念」＝フィクションを再生産するものであり、それ自体を表象的な力学の産物とみ

るべき」であるとしている。⁶⁾

歴史的社会的な背景を持つ表象関係から分離不可能な「地方」としての〈東北〉と、その中に営まれた、単純な包摂関係にとどまらない、摩擦や逸脱、枠組みの変更までも含んだそれらの様態を記述すること⁷⁾

こうした「摩擦や逸脱、枠組みの変更までも含んだそれらの様態」問題意識は、いわゆる言説分析の方法を踏まえたものであり、「地域性と文学」の研究においても、「地域性」概念そのものの歴史性を問い直しながら研究を進めなければならなくなっていることが、この森岡の論から理解できる。

一例として、「地域性と文学」における問題を幅広く追及している存在として近藤周吾の仕事がある。近藤は戦前期での富山の文学活動のルーツを探る中で、当時の新民謡の文脈に注目している。近藤によれば、1930年前後の富山詩壇は傑出した詩人はいないが詩人のネットワークが張り巡らされており、井上靖らの戦後の浮上の前提となったものである。それゆえに富山の文学研究は富山とその周辺の民謡をめぐるネットワークを調査し、それを視座にすることでより拡がりを持ち魅力的なものになるのではないかというのが近藤の仮説である。⁸⁾

この「民謡」概念の歴史性と政治性については、坪井秀人も論じており、坪井は「民謡」概念自体がヨーロッパの「Volkslied (Folksong)」概念の移植であり、近代以後に「民謡」概念が大日本帝国の版図をなぞり国民統合と軌を一にする形で構築されていった過程を北原白秋や志

田義秀の仕事を検証しつつ詳細に分析している。⁹⁾これは言説分析的な手法により「作られた伝統」とその政治性を明らかにしたものであり、近藤の論と合わせ読むとき、「地域性と文学」研究の厚みを増すとともにその豊かな可能性をも感じさせるものである。

二 コンテンツリズムと表象不可能性

現在での「地域性」表象と人文科学とのかかわりを示すものとしてコンテンツリズムがあげられる。コンテンツリズムについては「地域に関わるコンテンツ（映画、テレビドラマ、小説、漫画、ゲーム等）を活用して、観光と関連企業の振興を図ることを意図したリズム¹⁰⁾」というのが共通理解として流通していると考えられるが、このテーマについては近年多くの研究書が刊行されている。様々な分野の研究者の共同研究の成果である『コンテンツリズム メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』では、序章で編者の一人山村高淑が研究動向をまとめしており、山村はアニメーションリズム研究をメディア研究でのアダプテーション概念などを受けた近年のコンテンツリズムの研究史へと接続し¹¹⁾、そのうえでそうした研究とコンテンツリズム研究との差異を「物理的场所をメディアと見なし、リズム実践を、メディアを横断したコンテンツの展開、物語世界の拡張の推進力と考える、という点」に求めている。¹²⁾ 同書では第1章から第4章まで文学作品が題材として扱われ、ジェーン・オースティンとコンテンツリズムなどの問題が論じられている。

コンテンツリズムの主題として扱われることの多いいわゆる「聖

地巡礼」については大学での卒業研究でも扱われ始め、私自身、広島大学総合科学部の卒論指導でこのテーマに関する数名の指導を行ったことがある。その際の経験から見ても、「聖地巡礼」はコンテンツ・リズムの文脈で論じられることが多く、経済効果とそれを超える文脈をいかに読み解くかが重要であり、その分析に説得力を持たせるためにはフィールドワークやアンケート調査も含めてどれだけだけのデータを集められるかがカギとなる。

こうしたコンテンツリズムと文学研究の接点について近藤周吾は前掲論で「地域コンテンツの内実とは、狭く捉えれば地域を表象するアニメやゲームなどのポップカルチャーを指すが、最も広く捉えれば、映画や文学はもちろんのこと、地域と関わる美術や音楽、演劇などの芸術文化等も包摂する上位概念になりうる」¹³と述べたうえで次のような危惧を表明している。

すべてをひっくるめて、「コンテンツリズム」の一語に包摂できる。そして、たちまちにして、それぞれの差異が消失してしま¹⁴う。繊細なディテールが、それこそ一瞬で逃れ去ってしまうのである¹⁵。

ここで近藤は定義の包括性がもたらす暴力性―表象行為の暴力性―に自覚的である。「映画や文学はもちろんのこと、地域と関わる美術や音楽、演劇などの芸術文化等も包摂する上位概念になりうる」という問題設定は、「メディア」「物語」の概念を厳密に設定しないとすべてを包含しうる定義になってしまい、その結果「差異の消失」という事態を

生みかねない。

古くはマルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』において、近年ではサイドやスピヴァクの議論において問題化された表象¹⁶代行の不可能性の問題¹⁷は地域コンテンツをめぐる議論にも関係する。稲賀繁美は「オリエンタリズム」について次のように説明している。

「オリエント」とは西欧(近代)人の世界観によって規定された「東方」という人為的地理認識であり、その内実は場合によって伸び縮みする錯綜体をなす¹⁸。

そこに一貫してあるのは、オリエントはみずからを「表象」代表¹⁹できないから、われわれ西欧が代わってオリエントを表象²⁰代表してやろう、というすりかえの論理だ²¹。

サイドの言う「心象地理」(Imaginative Geography)とは、人為的に構成された「イメージとしての地理」であり、それであるがゆえに「伸び縮みする錯綜体」となりイマジナリーなイデオロギーの構成要素となる。「地域性」は地理的概念を含むものであるがゆえに「心象地理」として表象された場合、サイドが述べるようなイデオロギー構造に接合されてしまう²²。「空間」表象およびその人為性・歴史性の問題と表象不可能性の問題が「地域性」研究に浮上するのである。

ここでもう一つ付け加えておくべき論点は「空間論的転回」(エドワード・ソジャ)とよばれる1990年代以降の地理学の理論的転回²³である。近藤も「コンテンツリズムの研究が、そのような「空間」への意識化を後押しすることがあってよい」²⁴とこうした研究動向を意識して

いる。これらはフーコーの「空間」論やオリエンタリズム論などの成果を踏まえ、人間の「空間」認識に政治性や人為的歴史性を読もうとする試みであり、遠城明雄による「領域性」をめぐる明晰な論文²⁰やクロード・ラフエスタン、エドワード・ソジャらの研究がある²¹。遠藤によれば、「景観」概念は形態―機能的な問題設定によっており、「見る」と (Vu) を表象するのに対して、「領域性」の言語は関係的な問題設定に依拠し、「生きられること (vécu) を表象する」ものとされる。古典的な地理学は「可視的で観察可能な対象にのみ関わることで、つまり対象の「明証性」にとらわれることで、観察道具として「目」を特権化し、ひとつの「まなざし」を編成してきた」。これに対し、「「領域性」概念は、女性、子供、老人といった成人男性にとって「他者 (L'Autre) の立場にある人々の認識や体験を綿密に記述するように努めなければならず、相対的差異の絶対性に関心が寄せられることになる」²²。いわば非対称性を隠蔽する編成された視線による「景観」概念をより複数的な他者性の経験に開かれたものとして記述するために考案されたのが「領域性」概念なのである。

なお、鈴木規夫はサイドにも「視覚認識」問題へのアプローチの不十分性」という問題点がありそれは「サイドが分析の対象としたテキストは、すでに科学的言語が〈観察〉という視覚を従属させる構造の構成をほぼ整えた後に生みだされている」ことから来ている²³。と、サイドを乗り越えるためにはフーコー『レーモンルーセル』に学ぶことで「反視覚的言説の具現形態」において〈構造〉の問題を解決する必要性を述べている（この点については最終節でもう一度取り扱う）²⁴。

日本ではこのような新たな地理学研究の動きに対応して大城直樹、水内俊雄などの業績があり、本稿と関連する地域性と「領域」「空間」の表象作用が持つ権力性とを接続する論点は大城らが執筆者の郷土研究会編『郷土 表象と実践』が提出している²⁵。この「空間」概念の歴史性・人為性を論じる視角は「地域性」概念の歴史性を言説分析の手法で分析する研究と共通するものであり（ミシェル・フーコーが両者の靈感源にある）、今後の文学研究はこうした地理学やコンテンツツーツリズムなどの業績にも学んでいく必要があるだろう。

三 「コンテンツ足りないもの」への着眼―「地域性」と「固有名」―

九州を中心とする「西日本文学」の「地域性」を歴史的かつ政治的な文脈を意識して論じた仕事として、花田俊典『沖縄はゴジラか』『清新な光景の軌跡』がある²⁶。

花田が『清新な光景の軌跡』で浩瀚かつ縦横に論じているように「九州」という「地域性」表象には、筑豊の炭坑、長崎の原爆・キリシタン問題、熊本における水俣、沖縄とアメリカなどの問題群が含まれている²⁷。「西日本文学」への驚異的な目配りを誇る花田は、花田清輝の「楢円幻想」のごとき複眼で²⁸、水原秋櫻子の「浦上天主堂」連作に山田かんと井上光晴が示すアイロニーを配置し、永井隆の言説が示すGHQとの共振には福田須磨子の「同時代が醸成する無言の意志」を具現化する作品を対置して見せる²⁹。

『太宰治のレクチュール』³⁰でも発揮された膨大な資料の細部とそ

の行間に文学が表象する「同時代が醸成する無言の意志」「清新な光景の発見（＝創造）の軌跡」を読み解く「眼」、この気配＝場所の深奥の記憶―を感じ取る高感度のセンサー―こそが花田の真骨頂である。³⁰⁾

注意すべきは、これらの花田のあげた文学者の「固有名」が「コンテントゥーリズム」からも「聖地巡礼」からもずれたところに成立しているという点である。これはすなわち「消費しつくされたいもの」・「表象しがたいもの」への着眼といつてよく、近藤が前掲書の序論で述べた「切実性」の問題とも関わる（近藤がその例として挙げるのは水俣である）³¹⁾。

「固有名」の持つ確定記述に還元されない「此者性」については、そのかけがえのなさを拙稿において原爆文学との関連で論じた³²⁾が、かつて原爆文学に石原吉郎との比較を通じて「共役不可能性」の問いを導入した花田は「固有名」「単独性」の重要性を正確に理解していたのだといえよう。³³⁾ これは先に見た現代の地理学の「領域性」概念による「他者性」表象への動きとも連動している。

花田は『沖繩はゴジラか』所収の「時間という装置―「揺曳」・「水上往還」・「ソウル・トリップ」瞥見―」において原口真智子・崎山多美・山里禎子の作品を通じて「コト性のゆれを自在性へと切り返す方法」として彼女たちの〈時間〉性の処理に着目している。ここには「空間としての地理的場所への期待は、そのあまりの加速度的な均質化のゆえに、およそ褪せてしまったのではないか」という（本論文初出時の）1990年当時の花田の現状認識が反映している。³⁴⁾ 花田は中上の「路地」を「時間軸上に設定された聖地」とみなして批判的だが、この時期は中上が「平面のサーガ」（いとうせいこう）をめぐる格闘を『異族』などの諸作品

で行っていた時期でもあり、中上の文脈での理論的模索があったことを考慮に入れなければならない（この点についても後述する）。

また、花田は『沖繩はゴジラか』で「オリエンタリズム」の問題も沖繩の文脈を視野に入れながら慎重に検証している。本州の側からの沖繩表象が往々にして「オリエンタリズム」となってしまう点を批判し、崎山多美の作品読解を通じて花田は沖繩を「代表」するのではない、いかなる現実の場所にも帰属しない、権力によって名指されない「アモルフで、質量感があつて不透明である」表象を提出する。³⁵⁾ これは崎山||花田が文学の言葉で「他者 (L'Autre)」の立場にある人々の認識や体験を綿密に記述「しようとしたものに他ならない」。

このような表象を花田はスピヴァク『サブアルタンは語る』ことができるか』のデリダ読解を援用しながら「私たちの中の他者の声である内なる声に「うわ言」を言わせる (make the inner voice delicious)」とも言いかけている。³⁶⁾ この「うわ言」の形象化についてデリダとスピヴァクの別の論脈から解釈を試みたい。

鶴飼哲はスピヴァクの『ある学問の死 惑星思考の比較文学へ』について、「母」「ネーション」「神」「自然」などと形象||文彩化されたものたちを、「私」や「私たち」の再固有化の欲望から切断し、それぞれに固有な他者性において再考することを命じる³⁷⁾と述べている。

「再固有化の欲望から切断し、それぞれに固有な他者性において再考すること」、この「固有な他者性」こそが固有名の核心といえるものだが、花田はレヴィナスのブーバー論を援用し、「きみの他者性」への応答による「人間という被造物の同志性」を獲得することの重要

性を説いている。³⁸ これはレヴィナスの現象学的な思索の可能性を問
い直すことで他者性の重要性を論じているものである。

スピヴァクはデリダの「トレイオポイエシス」概念をフッサー
ルを補助線として拡大し、「他我は自我との類比を通して構成される
ほかなく、他我ならぬ他者は現象学的明証性においてはけつして直観
に与えられないこと」、「安定することがなく、友は敵に、善は悪に
つねに反転可能」⁴⁰ なものとして捉え直している。ここでは現象学的
な思考、殊に直観と他者表象の不安定性を逆手にとつて自己の中に無
数の他者を呼び込むものとして位置づけなおされている。⁴¹ こうした
議論を花田の他者論と重ね合わせ新たな理論的展開をはかることが必
要となる。

四 「北の想像力」から文学研究の固有性へ

花田の仕事は九州をはじめとする西日本の文学を検証したものだ
が、北海道の文学を持続的に検討している研究者・批評家として岡和
田晃と齋藤一の名があげられる。

岡和田晃は『北の想像力』において「北海道は、日本という国民国家
の内部に留め置かれながらも、常にナシヨナリテイの枠組みから逸脱す
ることを余儀なくされてきたトpos」⁴²（「北海道文学」は、当初から日
本ローカルの文学に終わらず、ゲーテの言う「世界文学」としての志向
性を強く有するものだった」⁴³）という問題意識から風巻景次郎「四十度
圏の思想」（1947）中野美代子『北方論』（1972）を「北海道の風土性
をグローバルな視点で再解釈するという意味で、今日のポストコロニア

リズム理論を見事に先取りしていた」⁴⁴ として両者の再評価を行つて
いる。

岡和田が理論的に参照するのはこれもスピヴァクの『ある学問の死
惑星思考の比較文学』だが、岡和田は「惑星思考の方法論で「北海道文
学」そのものを再定位させる作業」の必要性を述べており、⁴⁵ さらに自
身のS₂研究の論点をも重ね合わせ、「（北海道S₂）は脱地域性を志向
してきたが、同時に、地域の意義を再帰的に証だてるツールともなる」
としてその「ツール」としての二重性に注目している。

岡和田が「北海道文学」読解の軸のひとつとするのは林美脈子の仕事
であり、「風土と歴史を直視することによる他者性の取り入れ方」とい
う観点から林の詩を読解する岡和田は「北海道の負の歴史」「虐げられ
た者たちの声を決して聞き洩らさない」林の作品を「身体と風土を宇宙
論的なスケール」⁴⁶ として高い評価を与えている。これはまさに岡和田
の言う「ツール」の実践であり、岡和田の向井豊昭研究での作品の語り
口をベケットやヌーヴオーロマンを咀嚼した「世界文学」として分析す
る構え、⁴⁷ さらにそれを近年の木村友祐の仕事と重ね合わせることで
「方言や「東北」という枠組みを越えた、怒りの力を取り戻そうとい
う姿勢の強度そのもの」⁴⁸ を問題化しようとする論戦略には、「惑星思
考」としての「北海道文学」が持つアクチュアリテイがあふれている。
文学作品とその翻訳にポストコロニアルな関心と言説戦略を読み取
ろうとした試みとして齋藤一「売買川走」がある。⁴⁹

齋藤はジェイムス・ジョイスの柳瀬尚紀による『フィネガンズ・ウェ
イク』の日本語訳に北海道の地名が意図的に使われていることに着目
し、そこに北海道のアイヌと地名をめぐる闘争を読み取ろうとする（齋

藤も柳瀬も北海道出身である)。

さらにこの闘争がジョイスのアイランドをめぐる古代からの闘争の歴史と二重写しにされている。具体的には『フィネガンズ・ウェイク』冒頭の *ivernu* が「川走」(せんそう)と訳されている部分に「川あるところには戦争がある」というメッセージを読み取った齋藤は「それは私たちになんらかの影響をもたらし、どこかへ連れていくのだ」として、北海道のアイヌと川をめぐる戦争の歴史を検証していく。⁵⁰ こうした具体的な翻訳と修辭の細部に微細な政治的意図を読み込む。齋藤の読解は岡和田の言う「北海道の風土性をグローバルな視点で再解釈する」だけにとどまらず、テキストに戦争と植民地の記憶を読み込みながらさらに未来への展望と実践の可能性すら示唆するものである。そして齋藤の仕事においてもカギを握るのは北海道の(アイヌ語)地名という「固有名」なのである。⁵¹

コンテンツツリーズムなどの社会科学的な観点の研究に対して、文学研究の固有性を示すものとして提出すべき論点は、イメージやレトリック、文体などへの着眼であろう。先に見た岡和田や齋藤の仕事はそうした観点から見る文学作品の政治的含意への読解と違ってよいが、その論点に関して、坪井が先に見た近代詩史への言説分析的な読解と並行して『日本近現代詩を思い起こす』に結実する仕事を行っていることを想起するべきである。坪井は『戦争の記憶をさかのぼる』をはじめとする著作で言説分析とテキストへの脱構築的読解の両立を明敏な政治感覚とともにに行っている稀有な研究者だが、こうした方法意識は『日本近現代詩を思い起こす』でも貫かれている。

坪井が同書で金素雲『朝鮮詩集』や合衆国移民詩を論じつつ、第一章

で 100 ページ以上を費やして蒲原有明の象徴詩の技巧を分析しているのは重要である。坪井は「自然主義と象徴主義の間に宙づりになった蒲原有明の詩の問題を、〈詩語〉の問題」として考えることの重要性を説き、⁵² それは「その関節をずらすこと」によって規範定型を仮想領域に宙づりにし、意味的な位相と音律的な位相とが常にミニマルにずらされ、ずらされることによってその空隙を埋める連結がもたらされるというような、まったく新しい詩の形だった」と述べる。⁵³

この論点は萩原朔太郎らに有明の方法論が引き継がれなかったという近代詩史の問題点に関するだけでなく、北原白秋の『邪宗門秘曲』に内在する「内的なオリエンタリズム」⁵⁴ を暴き出す際にも有効に作用する。

オリエンタリズムのまなざしは、蓄えた財産を蕩尽するがごとくに次から次へとエキゾチズムとしての(あらかじめ異化されてパッケージ化された)言葉をくり出してテキストにちりばめて、そして放置する、北原の消費主義的な詩生産の一つの型を規定するとともに、その上でなおかつ、(蒲原有明とはまさしく対照的に)読者をほとんどストレスを感じさせないでテキストに誘い込む技術とも直結していた。⁵⁵

坪井は白秋の柳川を中心とした風土との関わり(白秋の関わった紀行文『五足の靴』(1908)を周到にも例に出している)が「〈南蛮〉(南方)へのまなざしを媒介にした(日本の発見)〈近代の発見〉という物語」を含意しており、それは「詩語として用いる日本語の透明性に対す

る」「盲目的な信頼」によって支えられていたとする。⁵⁷⁾

坪井が「質料的な多重性」と呼ぶもの、それは、「意味的な位相と音律的な位相とが常にミニマルにすらされ、ずらされること」によってその空隙を埋める連結がもたらされる」とする脱構築的読解によってもたらされる確定記述＝述語へと還元できない固有名の過剰性、そこにこそ宿る他者性と単独性の謂いである。そうした読解が蒲原有明のこれまでの研究史で顧みられなかった技巧についての原理的分析に立脚して成立していることは「地域性と文学」を論じるに際し絶えず顧みられなければならないポイントである。さらに坪井が同書の最終章で石原吉郎を論じ、石原における「(個)であろうとすること」「一人の名前」(つまり「固有名」である)の重要性を説いていることの意味を「地域性と文学」という主題を論じる際にもう一度噛みしめなくてはならない。⁵⁸⁾

岡和田、齋藤、坪井の仕事に見られるように、文学作品の技巧の分析と「地域性」の根幹にある地名・固有名単独性と他者性、その歴史における重さへの批評を両立することがこれからの「地域性と文学」研究に必要とされよう。

まとめにかえて―一つの理論的素描―

ここではかつて別稿で論じた議論⁵⁹⁾をもとに本稿で浮き彫りとなった問題点について理論的な素描を試みてまとめにかえたい。

先に花田が論じた「地域性」表象における時間性と空間性の問題、そして鈴木がサイドの陥穽として提出したオリエンタリズムの「まなざし」をいかにして乗り越えるかという問題を提出したがそれ等の問いへ

の暫定的な応答ともなるものである。

いとうせいこうは「平面のサーガ」で中上健次の『異族』のたくらみを「土地批判としてのサーガを希求した中上が、物語駆動の力を平面的分裂に置いたこと」⁶⁰⁾に見ているが、私はかつてその議論を受けて「歪み、違和、諸力の錯綜状態への感受性をいかにして具体的な作品として展開するかが「中上健次以後」を生きる表現者たちの課題」であると書いた。⁶¹⁾ 花田や岡和田が言及した現在の作家もまたこの課題を共有しているといえるが、花田もまた同様の問題設定―「加速度的な均質化」⁶²⁾にいかにして抗するか―の中で思考していたといっただろう。その問いが作家たちの時間性の表象の模索や「平面のサーガ」という空間性の極点への思考へつながっているのである。

『ドゥルーズ』は『フーコー』で、ストロブユイレ、ジーバーベルグ、マルグリット・デュラスの映画を「一方で声は、場所を持たない一つの物語のように現われ、そして他方で可視的なものは、物語を持たない空虚な場所のように現われる。」⁶³⁾と論じ、こうした可視性と表象、「物語を持たない空間」と「場所を持たない物語」の、空隙の上での再接合を、まさにフーコーのレーモン・ルーセル論を例に出しながら、「同じ運動において、話し、しかも見させること」⁶⁴⁾「外と内」、最も遠いものと最も深いものを接触させる「存在の襞」⁶⁵⁾としている。

この論点は鈴木というサイドの『オリエンタリズム』の視覚性偏重の問題点を補い、「反視覚的言説の具現形態」「他者の相対的差異の絶対性」を表象するための方法へのヒントとなりうるものである。

こうした可視性と表象、すなわち声と図像、場所と物語の分離と再接合について、宇野邦一はベケットに触れて次のように論じている。

声と図像は、こんなふうに文字において出会い、単位化され、線形化する以外にも、別の出会いを実現しうるのではないか。文字においてはおたかも声が図像の器官となり、図像が声の器官になってしまったかのである。そこで声と図像の、音声とイメージの、聴覚と視覚の一致や結合を解体し、再構成するという果てしない仕事を試みられることになる。⁶⁵⁾

宇野はベケットの『伴侶』を「声の虚構を解体」する作品とみなし、そこに「〈未生〉の声」「死者の声」を聞き取っている。このベケット理解は岡和田が晩年の向井豊昭に見出した闘争⇨逃走にも通じるものだろう。⁶⁶⁾

かつて私は拙稿で「平面のサーガ」をドゥルーズのフーコー論のひそみに倣い、「物語を持たない空間」と「場所を持たない物語」を「空隙」の上での再接合を行いつづけるものとしてとらえることを提唱した。⁶⁷⁾ さらに「物語を持たない空間」の生成・分裂の「空隙」に「精神の奥底でうごめいているもの、おしつぶされ、踏みつけられ、ゆるめられた、あるいは厚ぼったいイメージ」⁶⁸⁾としてとらえられる「〈未生〉の声」「死者の声」(まさに「場所を持たない物語」)、「可視性なき言葉」⁶⁹⁾を聞き取ることが3・11以後の文学の課題となると述べた。このフーコー⇨ベケットの可視性と言葉、声と図像の「空隙」と、坪井が有明に見出した「意味的な位相と音律的な位相」の「空隙」とを重ね合わせ、「詩語として用いる日本語の透明性に対する」違和の声を聞き取ること。

そうすることで、この課題は歴史の中の言説の狭間に聞こえるはずの「死者の声」「〈未生〉の声」(つまり「固有名の過剰性」)をいかにして表象するかという問いを共有する「地域性と文学」研究においても問いうるものとなるだろう。この「空隙」のずれに「死者の声」、「〈未生〉の声」、「違和の声」を聞き取る方法は「私たちの中の他者の声である内なる声」に「うわ言」を言わせる」というデリダ⇨スピヴァクの戦略にも、そして花田が崎山に読み取った「アモルフで、質量感があっても不透明である」表象の読解にも援用可能なものである。

文学の営為は絶えずそれを孕んだ「空隙」に書きこまれた「表象しがたいもの」、「消費しつくされないもの」に関わらなければならない。「固有名」の過剰性は其処にこそ宿るものであるだろう。「地域性と文学」研究もまた例外ではなく、その文脈でもいかにして「表象しがたいもの」、「消費しつくされないもの」を闡明するかが問い直されるべきであり、それは作品の技巧への詳細な読みと原理的な考察によつてなされなければならない。本稿がそのための礎の一つとなれば幸いである。

注

- (1) 『近代文学試論』第50号「特集 地域性と文学」(2012・12)。
- (2) 柳瀬善治「特集 島文学事典 担当箇所 伊勢志摩」(『紋説』Ⅲ(2) 2008 pp. 215-17)。柳瀬善治「異色の仕事人Ⅲ」(小松史生子編『東海の異才・奇人列伝』風媒社 2013)。
- (3) 近代編現代編の資料編の刊行がそれぞれ予定されている。
- (4) 森岡卓司「序——『地方文学研究』と近代日本における〈東北〉表象」(『1940

- 年代の〈東北〉表象』東北大学出版会 2016)。
- (5) 芳賀登『地方史の思想』(芳賀登著作選集第一巻 雄山閣出版 1999)、河西英通『東北—くられた異境』(中公新書 2001)。
- (6) 森岡前掲論 p.5。
- (7) 森岡前掲論 p.5。
- (8) 近藤周吾「富山県 富山市にある高志の国文学館 文学とサブカルチャーの両輪運動」(地域コンテンツ研究会編『地域×アニメ コンテンツシリーズからの展開』成山堂書店 2019)。
- (9) 坪井秀人「〈国民の声〉としての民謡」(『感覚の近代』名古屋大学出版会 2006)。
- (10) 国土交通省・経済産業省・文科省の報告書の定義による。引用は近藤論文 p.18より行った。
- (11) 山村が例に挙げているアダプテーション研究は大塚英志『メディアミックス化する日本』(イースト新書 2014) などである。
- (12) 山村高淑・フィリップ・シートン編『コンテンツツウリズム メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』(北海道大学出版会 2021)。同書のコンテンツツウリズムの定義は「コンテンツによって動機づけられた、一連のダイナミックなツウリズム実践・経験。コンテンツユーザーリストは、〈コンテンツ〉化を通して絶えず拡張する〈物語世界〉にアクセスし、それを身体化しようと試みる」(p.16) というものである。
- (13) 近藤前掲論 p.26。
- (14) 近藤前掲論 p.23。
- (15) カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』(植村邦彦訳 太田出版 1986)。ガヤトリ・スピヴァク『サブアルタンは語ることを
 ができるか』(みすず書房 1998)。
- (16) 稲賀繁美『オリエンタリズム論』(山内昌之・大塚和夫編『イスラームを学ぶひとのために』世界書院 1993 p.276)。
- (17) 稲賀前掲『オリエンタリズム論』p.281。
- (18) サイドの「構造」概念の検証として鈴木規夫「〈オリエンタリズム〉の構造と権力—サイドにおける〈視覚認識〉問題における限界—」(鈴木規夫『光の政治哲学 スフラワルディーとモダン』国際書院 2008)。
- (19) 近藤前掲論 p.23。
- (20) 遠城明雄「〈領域性〉に関する研究ノート」(『史淵』130 1993)。
- (21) クロード・ラフェスタン「領域性—社会地理学の概念あるいはパラダイム—」(『空間・社会・地理思想』1 1996)、エドワード・ソ ज्या『ポストモダン地理学』(青土社 2003)。
- (22) 遠城明雄「〈領域性〉に関する研究ノート」p.39。
- (23) 鈴木規夫「〈オリエンタリズム〉の構造と権力—サイドにおける〈視覚認識〉問題における限界—」(鈴木規夫『光の政治哲学 スフラワルディーとモダン』国際書院 2008 pp.215-216)。
- (24) 郷土研究会編『郷土 表象と実践』(嵯峨野書院 2003)。遠城、大城が関わった『空間から場所へ地理学的想像力の探求』(古今書院 1998)。またマルクス主義的な観点から見た空間概念の検証として D・ハーヴェイ『都市の資本論』(青木書店 1991) がある。
- (25) 花田俊典『沖繩はゴジラか—〈反〉・オリエンタリズム—南島ヤポネシア—』(花書院 2006)、『清新な光景の軌跡』(西日本出版社 2002)。
- (26) 沖繩については新城郁夫『沖繩文学という企て—葛藤する言語・身体・記憶』(インパクト出版 2003)、村上陽子『出来事の残響—原爆文学と

- 沖縄文学』(インパクト出版 2015)、長崎については山田かんの仕事(とくにその永井隆批判)、筑豊については谷川雁、上野英信、森崎和江の諸作品、水俣については石牟礼道子『苦海浄土』(講談社文庫 2004)をそれぞれ参照。
- (27) 花田『清新な光景の軌跡』pp. 30-32。
- (28) 花田『清新な光景の軌跡』(西日本出版社 2002)。花田の随伴者であり『清新な光景の軌跡』の索引作成にも関わった坂口博の『校書掃塵―坂口博の仕事―』(花書院 2016)も併せて参照。
- (29) 花田俊典『太宰治のレクチュール』(双文社出版 2001)。
- (30) 花田前掲書 p. 17 pp. 762。
- (31) 近藤前掲論 p. 28。
- (32) 拙稿「森瀧史郎研究覚書その二―「中動態の哲学」を經由して原爆文学研究への架橋を試みるためのノート」(『原爆文学研究』20 2022・3)。
- (33) 花田俊典「原爆の再問題化のために アウシュビッツ・シニリヤ・そしてロシエナガサキ」(『紋説』19 1999)。
- (34) 花田俊典『沖縄はゴジラか』p. 165' 167'。
- (35) 花田俊典『沖縄はゴジラか』p. 71'。
- (36) ガヤトリ・スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』(みすず書房 p. 70)。スピヴァクが引用するデリダの発言についてはジャック・デリダ『哲学における最近の黙示録的語調について』(朝日出版社 1984)および Jacques Derrida and John P. Leavy Jr. Of an Apocalyptic Tone Recently Adopted in Philosophy Oxford Literary Review Vol. 6, No. 2 (1984)を参照して英語原文を補った。
- (37) 鶴飼哲「死せる歡智」と「生ける狂氣」(『まよえ』星の比較文学) (『ペンキ―デリダの墓』みすず書房 2014 p.235)。
- (38) 花田俊典『沖縄はゴジラか』(花書院) p.21'。
- (39) 「レイオボーイエーシス」についてデリダは「行為遂行と事実確認との、本体的ない、移植による、合同的かつ同時的な生殖」(デリダ『友愛のポリティック』I 2003 みすず書房 p.60)、スピヴァクは「逆転を正当化するのではなくて、むしろ、遠く隔たったところから作り出す」(『ある学問の死』p.19)、鶴飼は「ニーチェのテクストに働いているようなこのような友愛の力」を、constative performative でもあるような、あるいはむしろ、何らかの約定および意志を前提とするどんな performative をも超えた、したがってニーチェ自身の「力への意志」の教説さえ逸脱するような出来事として記述する「概念(鶴飼 p.226)と説明している。
- (40) 鶴飼前掲書 p.253'。
- (41) この点について拙稿「森瀧史郎研究覚書その二―「中動態の哲学」を經由して原爆文学研究への架橋を試みるためのノート」(『原爆文学研究』20 2022・3)。
- (42) 岡和田晃『北の想像力』p.20'。
- (43) 岡和田晃『北の想像力』p.21'。
- (44) 岡和田晃「批判的地域主義としての惑星思考」(『異孝之臨修』脱領域・脱構築・脱半球』小島遊書房 2021)。
- (45) 岡和田晃前掲書 p.21'。
- (46) 林の仕事をシェンダーSFの観点から読み解いた論として岡和田晃「林美脈子と『内宇宙』」(『現代詩手帖』2015・5)。
- (47) 岡和田晃『向井豊昭の闘争 異種混交性(ハイブリディティ)の世界文学』(未央社 2014)。同書のモチーフは「二人の固有名の周縁から浮かび上がるもの

- を、歴史の傍流としてのみ理解せず、世界を読み替える新たな指針として逆照射する」と (p.197 傍点引用者) という一文に明瞭である。
- (48) 岡和田晃「夷を微かに希うもの——向井豊昭と木村友祐」(「すばる」2014・12)。「岡和田」「惑星思考」という民衆史『凍てつく太陽』(幻冬舎『ノールデンカムイ』(集英社)『熱源』(文藝春秋)『ミライミライ』(新潮社)「岡和田晃編『現代北海道文学論』藤田出版エクセレントブックス 2019)も参照。
- (49) 齋藤一「売買川走」(筑波大学文化批評研究会編『テキストたちの旅程——移動と変容の中の文学』花書院 2008)。
- (50) 齋藤一「売買川走」前掲書 p.312。
- (51) 齋藤一「柳瀬尚紀訳『フイネガンズ・ウェイク』I〜IVにおけるアイヌ語地名」(筑波大学人文社会科学研究所文芸言語専攻『文藝・言語研究』2005)。
齋藤一「柳瀬尚紀——地名で世界と結び合う翻訳の可能性」(岡和田晃編『現代北海道文学論』藤田出版エクセレントブックス 2019)。
- (52) 坪井秀人『戦争の記憶をさかのぼる』(ちくま新書)。同書に対する書評として拙稿「書評『戦争の記憶をさかのぼる』(ちくま新書)」(『日本文学学会東海支部会報』6 2006・2)。
- (53) 坪井秀人『日本近現代詩を思い起す』(思潮社 2020 p94)。
- (54) 坪井前掲書 p.101。
- (55) 坪井前掲書 p.174。
- (56) 坪井前掲書 p.174。
- (57) 坪井前掲書 pp.187-188。
- (58) 坪井前掲書 p.407 p.415。
- (59) 拙稿「三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書その3——現代小説を題材にして「核」と「内戦」について考える」(『原爆文学研究』13 2014・12)。
- (60) いうせいこう「平面のサーガ」(『中上健次全集』2巻)解説。
- (61) 前掲拙稿「三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書その3」。
- (62) G・ドウルズ『フュー』(河出書房新社 1987 p.103)。
- (63) G・ドウルズ前掲書 p.106。
- (64) G・ドウルズ前掲書 p.174。
- (65) 宇野邦一『映像身体論』(みすず書房 2008 p.181)。
- (66) 岡和田晃『向井豊昭の闘争』p.92の向井の遺稿「用意、ドン！」読解を三参照。
- (67) 拙稿「平滑空間」に浮かび上がる「いまだ生まれていないもの」の声——三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書その2——(『原爆文学研究』12 2013・12)
- (68) 宇野邦一前掲書 p.219。この一文はアントナン・アルトールのテクストからの引用である。「映画の早発性痴呆」『アントナン・アルトール著作集Ⅲ 貝殻と牧師 映画・演劇論集』白水社 1996 p.33)。ただし、宇野の訳文と邦訳著作集の坂原眞理訳とは若干の異同がある。
- (69) 前掲拙稿「平滑空間」に浮かび上がる「いまだ生まれていないもの」の声」。
- (やなせ よしはる、広島大学総合科学部准教授)